

『ニョニヤとババ』

—Straits Chinese を巡る比較文化論的考察—

山田 洋

日本大学大学院総合社会情報研究科

Nyonya and Baba

—A Cross-cultural Study on the Straits Chinese—

YAMADA Hiroshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This is a cross-cultural study on ethnic Chinese called Nyonya, Baba and/or Straits Chinese in Southeast Asia. By comparing a novel of “Malayan Chinese Literature,” which describes the lives of Nyonya and Baba, with the life of Lee Kuan Yew, the first prime minister of Singapore, I would like to examine their ambiguous identity in order to show the importance of maintaining one’s ethnic identity through his/her “mother tongue.”

Keywords: Straits Chinese, Malayan Chinese Literature, acculturation, identity, mother tongue.

1.はじめに

本論文は、旧英領マラヤ（現在のマレーシア半島部とシンガポールを含む領域）で出版された小説『ニョニヤとババ』¹ を巡り、文化変容の度合いの高い特徴的な華人² 集団に関する比較文化論的考察を試みるものである。

この小説では、マラヤで「ニョニヤ」や「ババ」と呼ばれた西洋志向の華人の生き方が批判的に描かれている。アイデンティティの危機等、グローバル化に伴う現代社会の問題と共通するテーマが扱われており、この作品を巡り考察する意義は少なくないと思われる。

退廃的な人生を送ったババの父親とは異なり、その息子が西洋一辺倒でなく母語学習も重視して自己の文化的基盤を保持する決意を示すところで、同小説は終了する。その決意の正否は後世の読者の判断に委ねられた形となっているが、上記のような現代社会の問題を勘案すれば、同小説における主張は一定の普遍性を持つものと考えられる。

そのため小論では、その後マラヤ華人の間で自己の文化的基盤の保持を巡る取り組みが実際にどのように展開されたか、シンガポールにおける具体的政策

を通じて跡づけ、同小説における主張の普遍性を明らかにすることを試みたい。考察を進める上で、同国の諸政策を考案し、強力なリーダーシップで推進した Lee Kuan Yew の文化的特徴に注目したい。

考察の手順として、まず、同小説を含むマラヤの華文（中国語）文学の概要を踏まえた上で、同小説に描かれた華人の意識のあり方等について、作者の経歴や作品の時代背景等に目を配りながら論じたい。そして、マラヤ華人の特徴を考察するとともに、文化変容の度合いの高い華人集団の出身である Lee に関して、具体的発言を通して言語観や文化観を明らかにすることを試みたい。さらに、彼が考案、推進した言語政策等を取り上げ、自己の文化的基盤の保持に果たした役割について論じることとしたい。

なお、小論は文学研究を目的とはしないため、作品の詳細については深く論じず、また、原典ではなく日本語版に拠ることとしたい。

2. 馬華文学と「僑民意識」の変容

『ニョニヤとババ』は、「馬華文学」と呼ばれる独特な文学に位置づけられる作品である。シンガポールの著名な華文文学者・方修は、馬華文学の特徴と

して、旧英領マラヤ³で口語体の華文（中国語）で書かれた文学であること、中国の五四文化運動の影響で1919年に誕生したこと、反帝国主義・反封建主義を標榜するものであること等を挙げている（5）。

馬華文学の発展の諸段階について、太田および今富が政治的背景や馬華文学の独自性の表れ方を踏まえて詳述している（98-112）。小論では、特にマラヤ華人の帰属意識との関わりに注目し、太田および今富の区分に沿って馬華文学の歴史を概観したい。

第一段階は1919年の誕生から1931年頃までである。この揺籃期には、中国本土の政治や文化の問題が専ら扱われ、意識のあり方は「僑民思想濃厚」（太田・今富 99）であった。馬華文学は新聞の副刊（文芸ページ）を主な媒体としていたため、1925年に複数の華字紙が副刊を創刊したことで弾みがついた。1920年代半ばには中国の革命文学の影響を受けた「南洋新興文学運動」が起こる（方修 6）など、依然として「中国文壇の思潮や中国の政治状況を忠実に反映」（荒井 1987 70）する動きがあった。しかし、これと並行して「南洋の色彩を文芸の中に盛り込もう」とする主張も現れ（太田・今富 100）、「本家」としての中国本土の文学界に対して馬華文学の担い手が独自性を徐々に主張し始める動きもあった。

第二段階は1930年代前半から日本軍政によって活動が中断される1942年頃までである。左傾化に対する当局の弾圧によって馬華文学は停滞期に入ったが、1937年の日中戦争勃発に伴い抗戦文芸が興り、中国本土から戦火を逃れて著名な文学者がマラヤに多数渡来したことで相俟って、「馬華文学の黄金時代を築いた」（田中 85）。しかし、中国本土から持ち込まれた抗戦文芸のスローガンを巡る論争や、避難してきた文学者、知識人に対する批判も起こるなど、マラヤ華人の「僑民」意識は複雑な様相を呈した。太田および今富は、「マラヤ華人の中国本土に対する心情には求心性と離心性の相反する二つの傾向をみることができる」として、大変示唆に富む見解を示している（103）。

ここで、当時のマラヤ華人の帰属意識の実態について考えてみたい。英国の移民制限令（1928年）やそれに続く大恐慌の影響で、移民の流入が1930年代以降鈍化し、日中戦争勃発後は華人の帰国が困難と

なったこともあり、移民に占める定住者の割合が増え始めていた（田村 38）。戦時中は故国との通信・交通が途絶えたこともあって、「僑民」意識は希薄化する方向に徐々に変容していったものと考えられる。しかし、原によれば、1947年初頭の華字紙『南僑日報』の世論調査の結果、マラヤ華人の95.6%が中国国籍を維持したままマラヤ公民になることを希望していたという（209）。⁴ 当時、中国が血統主義の伝統の下で国外に居住する華人を自国民と見なしていたこと（Suryadinata 62）も、華人に「僑民」意識を維持させる効果があったものと考えられる。こうしたことを勘案すれば、太田および今富の上記の見解は的を射たものであるように思われる。

馬華文学は、日本軍政下の空白期を経て戦後の第三期に入る。この時期の主要な出来事として、まず、馬華文学の独自性を巡る論争が起こった。マラヤの独立の可能性が見えてきた段階であったため、「南洋華人」としてのアイデンティティの確立が必要であったこと、その理論的裏付けも必要であったことが背景にあった（太田・今富 113-14）。しかし、1948年6月、マラヤ共産党（MCP）の武装闘争に対し英国植民地政府がマラヤ全土に非常事態を宣言し、言論・出版に対する弾圧を行ったため、馬華文学は停滞を余儀なくされた。

停滞から抜け出す契機となったのは「反黄運動」であった。これは、退廃的文化を排し華人の「文化の浄化を求める運動」、「権利回復を求める運動」であった（太田・今富 108）。その端緒について、田中は、反英運動としての文化運動が興ったと見る見解を示している。当時マラヤ連邦ではマレー語が唯一の公用語と定められており、シンガポールでは英語を共通語として普及を図る政策を発表していたため、華語の将来に不安を抱く華人が反英文化運動を展開し「西洋文化を退廃的な「黄色文化」として排撃」したという（田中 91）。⁵ しかし、「反黄運動」は1957年のマラヤ連邦独立に伴って収束することとなった。

以後、1963年のマレーシア成立で再び復興期を迎えたものの、1965年のシンガポールの分離独立や1969年のマレーシアの「5月13日事件」等を経て、馬華文学はまたも厳しい状況に直面することとなっ

た。⁶ マレー人優遇策のもと、非マレー系が母語で書いた作品は「移民文学」として差別扱いを受けることとなったのである（太田・今富 110）。

太田は、華語が非主流派の言語であって情報媒体としても限界があるとした上で、華文文学で華人アイデンティティを強調しようとする文学者がマレーシアには少なくない旨を述べている（1998 148-49）。マイノリティの文化的拠り所になっているとの指摘だが、そのアイデンティティが「僑民意識」とは異なることはもはや論を俟たないであろう。

3. 小説『ニョニャとババ』

馬華文学に関する上述の概観に基づき、以下、『ニョニャとババ』の特徴等を考察したい。

まず、作者・方北方の経歴を踏まえておきたい。⁷ 方は 1918 年に中国・広東省で生まれ、1928 年に両親と別れて旧英領マラヤのペナンへ渡り、伯父の家に身を寄せた。日中戦争の勃発に伴い、抗日運動に加わるため 1937 年に中国へ戻ったが、1947 年の伯父の死後再びペナンへ渡った。以後、同地で華文中学の語学教師となった彼は、教育界に身を置きつつ精力的に文筆活動を行い、マレーシアの華文作家協会の役員を歴任した。

1950 年代に華語の将来に不安を抱く華人が反英文化運動を展開したことは既述のとおりであるが、教育者として方も華人の教育の行方を懸念していた。戦後、華語を教育用語とする学校は戦前より厳しい統制を受けるようになり、「中学校は発展のしようがなかった」（3-4）と方は述懐している。揺籃期の馬華文学の担い手と同様に、方も華人の民族教育に対する使命感を抱いていたと考えられる。⁸ 反英文化運動が展開された時代に、そのような使命感に基づいて方が執筆した小説が『ニョニャとババ』であった。

同小説の粗筋は以下のとおりである。

中国から東南アジアへ大量の移民が流入していた清朝時代、貧しい農民だった李天福は出稼ぎ労働者「苦力」としてインドネシアに渡った。タバコ園で三年間の苦役に耐えた後、一度は郷里に戻ったが、妻子の死に失意を抱いた李は再び東南アジアのペナンへ渡った。

同地のゴム園で働き始めた李は、経営者の林ニョニャと所帯を持った。マラヤ生まれの彼女は西洋かぶれの母親の影響を受けて育ち、英語学校で教育を受けた女性だった。20 歳で同級生の陳フィリップと結婚したが、直後に陳が病死し、ニョニャは未亡人となった。息子の林ババを出産した後、彼女は事業経営を志し、ゴム園の経営権を手に入れた。

やがて、李天福と林ニョニャは階級や出自の違いを超えて結ばれたが、林ババは李天福になつかなかった。ニョニャの方針で 5 歳の時に英語の勉強を始めたババは、母親同様に西洋かぶれの子供として育った。彼が病気休学の後に中等教育に復帰する際、李天福は彼に中国語の勉強をさせるようニョニャに提案するが、彼女はこれを聞き入れず再びババを英語学校に通わせた。ババの成績は優秀だったが、間もなく彼は英語しか話さなくなった。

ババから父として受け入れられない李天福は、数年後に寂しく息を引き取った。悲嘆に暮れたニョニャは一人息子に望みを託したものの、逞しい青年となったババの西洋かぶれはさらに強まり、傲慢になって一般の華人だけでなく母親をも軽蔑するようになった。

ババはニョニャの意向を無視して素性の確かでない女性と結婚した。親子の溝は深まり、数年後ニョニャは悲嘆に暮れながら死んでいった。傲慢なババは、中等教育を終えてから無為徒食の人となり酒や博打に明け暮れ、やがて家産を食いつぶし、妻を自殺に追いやってしまう。やがて日本軍政下の日々が始まると、狡猾なババは軍幹部に取り入って金儲けに成功するが、戦後すべてを失った。ただ、9 歳の一人息子、細峇だけが彼の財産となった。

親戚の家で育てられた細峇は、父親とは異なり華文学校に入学し、華語や華人の歴史を学んだ。「細峇の父親は自分の祖国をイギリスだと考えていたのに対して、細峇は中国が自分の祖国だと思っていた。これが最もはっきりした違いだった」（190）。⁹

細峇は同年代の親戚の子らと自分たちの教育について話し合い、ババと異なり「マラヤの青年は英語教育を受けるだけでなく、必ず母語で教育を受けるべき」、「そうすれば、自分の文化を忘れてしまうようなことにはならない」と決意するのだった。この

決意を胸に、1953年に細峇がマラヤの地を離れる決心をしたところで物語は終わる。

若干教条主義的な部分があるとの印象を受けたり、人物描写に図式的なものを感じたりするものの、同小説は示唆に富むものと思われる。それは、ニョニャやババに代表される西洋かぶれの華人に関する描写に端的に表れている。この文化変容の度合いが高い特徴的な華人については後述するが、ここでは同小説における主な描写を通して、そうした華人の特徴、特に帰属意識や価値観のあり方を明らかにしておきたい。

まず衣食住に関して、「中国の服を脱ぎ捨てて（中略）家にいる時は必ずサロンをつけていた」、香辛料のきいた料理を「箸を使うのをやめて手で食べる」等、「生活様式は全部、母親の影響で南洋化してしまった」ことがニョニャの特徴として描かれている（97）。

西洋かぶれのババはある朝、級友と道を歩いていたらところ継父の李天福に出会い、彼に話しかけられ英語で返事をした。そして級友に対し“*He is not my father, he is a Chinese.*”と言ったのだった。上述のとおり「自分の祖国をイギリスだと考えていた」彼は李天福を見下しており、自分のことを同じ中国人とは考えていなかったのである。彼は周囲の教師や友人に対してだけでなく「母親と口を聞くときは、ほとんど英語ばかり使っていた」し、「中国的な倫理教育は受けなかった」（140）。ニョニャもそれをよしとしていたのである。

既述のとおり中国語教育を李天福に提案された際、ニョニャは強く反撥した。「中国語の本なんて勉強して、一体何の役に立つというんです？」、「今、南洋ではどこも中国語の本を勉強した人を必要としないわ。私たちも中国へ帰るつもりはないのだから、中国語で勉強しなくたってどうってことないわ。」、「本家本元のイギリスに行こうとしたって、英語ができなければ何の望みもないわ。」（143）。実利主義的な英国崇拝の信条の表れである。

そうした信条を持つ母親の影響でババの西洋志向も強まっていった。何人かと訊かれて自分はイギリス人だと言えなくとも、「僕の祖国はイギリスさ。」とババは得意げに答えるのだった（152）。そして、

「中国人を前にすると自分は格が上とばかりに振るまい、外国人の前では自分を卑下する。（中略）英語教育を受けていない二世たちに対してさえも、鼻であしらうような態度をとる。」（153）。ババが宗主国に帰属意識を持っていたことがわかる。

ババの西洋かぶれや傲慢さを、親戚たちは異口同音に批判する。「もしあの子に三、四年中国語の勉強をさせていたら、それに家長が立派な教育を受けた人間だったら、あれに中国の立派な道徳っていうものを少しは身につけさせることができただろうに。」（146）

息子の細峇もこう言っている。「（父が）英語教育だけ受けて、中国語教育の方は全く振り向きもしなかったんだよ。それで、自分の民族の文化がなんたるか、全然心に思い描けないようになってしまった。それどころか、自分達の方言さえもしゃべれないんだ。¹⁰ それで、家族や親戚の者にも親しみが持てなくなっちゃって…あれじゃ、まるで西洋人だよ。」（193-94）父親が文化的な根なし草の状態にあるとして、息子の見方は辛らつである。

しかし、本人が言えなかったとおり、ババが「西洋人」でないことは言うまでもない。それを自覚しながらも宗主国に帰属意識を持ち、かつ、そのことに疑問を抱かないババのあり方は、一般の華人の反撥を招いたものと考えられる。荒井は、上述の抗戦文芸の時代に「マラヤの愛国運動は華僑史空前の高揚を呈した」と述べ、「漢奸の摘発制裁」も行われ被害者の「ほとんどがババ華人」であったと指摘し、それがマラヤ化あるいは英国化した華人に対する「中国民族主義からの非難であると理解」できるとの見解を示している（1987 73-74）。¹¹ババの親戚や細峇の見解は華人大衆に共通のものであったと考えられる。

以上、文化変容の度合いが高い華人に関して、帰属意識や価値観のあり方を巡る視点で、小説『ニョニャとババ』に描かれた特徴を明らかにした。上述のとおり、若干教条主義的かつ図式的な印象を受けるものの、ババに対する排斥や反黄運動が展開された時代背景を勘案すれば、方の描写は納得できるものがある。ニョニャやババの会話の描写に関して、方は作中でしばしば英語で描いており、一般の華人

と異なるババたちの特異性を浮き彫りにしている。また、マレー語の音に漢字を当てたものも随所に用い、馬華文学の独自性を示している。小論は文学研究を行うものでないため、同小説の文学的価値は論じないが、東南アジアの華人のアイデンティティの態様を考察する上で極めて示唆に富む作品である。方は、華人集団の意識の変容に関して、「長期にわたる精神のあり方を刻んでおきたかった」と同小説の創作意図を語っているが(5)、その試みは成功を収めていると言えるだろう。

4. 華人社会の形成と変容

では、華人のアイデンティティの態様を巡る視点を軸として、旧英領マラヤの華人社会の形成と変容について、同小説が発表された1950年代半ば頃までの状況を概観したい。

中国から東南アジアへの移民の流入は長い歴史を持つが、本格化したのは19世紀以降のことである。その背景としては、1833年に黒人奴隷制の廃止条例を制定した英国が植民地経営に代替労働者を必要としたこと、1840年に勃発したアヘン戦争により中国華南一帯の農村経済が解体され流浪を余儀なくされた農民が現れたこと、1860年の北京条約によって清朝の海禁政策が幕を閉じたこと等が指摘されている(戴1980 33)。

華人移民は増加を続け、マラヤにおける人口比率は、1930～1940年代に至りマレー人と華人の割合がほぼ拮抗するようになった(田中 26)。また、連合マレー州では1934年に華人の人口がマレー人を上回るまでになっている(アリ 80)。¹² こうして急激に増加した華人の大多数は、「出身地別の方言グループ、すなわち幫(パン)に分かれて組織化された(太田・今富 82)。¹³ 方言の異なる華人集団相互間の意思疎通は容易でなく、幫を単位として住み分けを行う華人社会は全体としてまとまりのないものだったと考えられる。¹⁴

このような華人集団の「僑民」意識が、1930年代以降に定住者の割合が増え始めるまで概して濃厚だったと考えられることは、既述のとおりである。「マラヤへの初期移民は家族単位で行くことが禁止されていた(太田 1994 39) こともあって、彼らの多

くがやがて郷里に帰ることを夢見ていたことは想像に難くない。¹⁵ 人々の「僑民」意識が強くとまりのないマラヤの華人社会は、それでも20世紀初頭から徐々に組織化されるようになった。

まず海峡英籍華人公会 (Straits Chinese British Association[SCBA]) が1900年に結成された。これは、小論で取り上げた小説の題名に使われた「ニョニヤ」や「ババ」、または「プラナカン」、あるいは Straits Chinese と呼ばれた特異な華人集団の組織である。詳細は後述するが、英領植民地時代以前に渡来した古い移民の子孫で文化変容の度合いが高い彼らは、他の華人と異なり幫によって組織化されず、氏族や地縁によるまとまりを欠いていた。そのため、結束力の弱さを補うため様々な組織を設立したが、SCBAはその代表で、弁護士や医師、教師等、英語教育系華人のエリート層を主な構成員とする団体であった。¹⁶

Straits Chinese は、華人の中で現地化や上昇志向の強い人々が、植民地体制に適應する過程で誕生した集団であると考えられる。太田が指摘するとおり、「植民地政府は華人にマラヤ社会における middleman の役割を期待し、華人はそれによく応えた(太田 1998 13)。英語を習得して社会的上昇を果たした彼らは次第に他の華人集団から離れ、大量移民の開始から一世紀半で「華人は華語系と英語系に大きく分かれた(1998 13) のである。

英国に忠誠を誓う Straits Chinese は華語系華人にとって異質な存在であり、階級の違いも相俟って、概して華語系華人の反撥を招いたものと考えられる。Straits Chinese は「中国から忘れ去られた文化上の脱落者」と見なされ、「このような型の集団にはなりたくない、というのが伝統的華語社会に生きる人々の共通理解」であるとの見方がある(太田 1998 80-81)。既述のとおり、馬華文学の抗戦文芸期に行われた「漢奸の摘発制裁」の被害者はほとんどが「ババ華人」であった事実は、この見方が妥当なものであることを示している。幫を抛り所とする華語系華人は、幫相互の問題を解決するための上部組織として1906年に中華総商会を設立した。英国植民地当局は中華総商会に特別な地位を認め、同会と良好な関係を保つことで幫を温存し、分割統治を確立していったと

の指摘がある（田村 36）。¹⁷

マラヤ華人は華語系と英語系に大きく分かれ、それぞれ組織化を進めていったのだが、以上のとおり、いずれに対しても英国植民地当局が影響力を行使していたことがわかる。英国に忠誠を誓う *Straits Chinese* は華人とマレー系種族の仲介者としても重用されたし、華語系華人に対しては幫を温存することで彼らが結集力を高めることを阻害した。英国は植民地経営に華人集団を巧みに利用したといえるであろう。

あえて単純に図式化すれば、植民地当局に迎合することで社会的上昇を果たしたものの文化的基盤を喪失した華人の集団と、社会的地位は低いが中国への帰属意識や伝統文化を保持する華人の集団という、対立的な二つの華人集団が存在していたということが出来る。¹⁸ それぞれの立場を代表する団体が 20 世紀初頭に設立された後も中国からの移民流入が続き、1920 年代にピーク期を迎えた（田中 81）ことから、割合としては華語系の華人が多数を占めていたことは明らかである。また、大量の移民流入の開始から歴史が浅かったことも勘案すれば、マラヤ華人の多くは「僑民」意識を持つ人々であったと考えられる。

既述のとおり、日中戦争勃発後に華人の帰国が困難となったが、戦後は「祖国」中国の解放でマラヤ華人の「僑民」意識が強まった可能性もあると思われる。しかし、1949 年の中華人民共和国成立後、中国共産党の影響が及ぶことを危惧した英国は華人の中国旅行を制限したため、華人は「落葉帰根」（いずれは郷里に帰ること）から「落地生根」（居住国に根を張って生きること）¹⁹ への方向転換を意識せざるを得なくなったと考えられる。

また、既述のとおり中国は血統主義の伝統の下で国外に居住する華人を自国民と見なしていたが、1950 年代半ばに二重国籍否定に政策を転換した。²⁰ このことも、華人の「僑民」意識に変容を促す契機となったといえるだろう。この頃、華語の将来に不安を抱く華人が反黄運動を展開していたことは既述のとおりだが、華人と言語のあり方に関して「祖国」の首脳が興味深い発言を行っている。周恩来首相（当時）は、ビルマ華僑に対する講話の中で、中国人が

外国語学習に関して概して保守的であること、外国に居住している以上は外国語を学習する必要があること、華僑学校でビルマ語を必須科目にすべきであること等を力説している。²¹ 他国の僑胞に向けられた講話であるが、中国の華僑政策の変化にマラヤ華人も敏感に反応した可能性があると考えられる。

マラヤ連邦は 1957 年 8 月、英連邦の一員となる形で独立を果たした。国交のない「祖国」中国に華人が帰属意識を持ち続けることは困難であったと考えられる。マラヤ連邦独立を踏まえ、中国でなくマラヤへの帰属意識を表明する記事が華字紙に掲載されたとの指摘もあり、徐々にマラヤ華人のアイデンティティの変容が余儀なくされていったと思われる。²²

以上、小説『ニョニヤとババ』が発表された頃までの旧英領マラヤの華人社会について、アイデンティティの態様を巡る視点を軸として考察した。同小説の作者である方北方は、「時代が変わるにつれて変化していく華僑達の意識」や、華人社会の「長期にわたる精神のあり方」を描くことが、同小説の創作意図である旨を述べている（5）。上記の華人社会に関する概観は、作者の創作意図を理解する一助になったものと思われる。

小説『ニョニヤとババ』はあくまで虚構であるが、それでは実際の社会で華人の意識や「精神のあり方」についてどのような取り組みが展開されたのであろうか。それを明らかにするため、旧英領マラヤの一部であったシンガポールの社会を取り上げ、為政者の特徴や文化観を考察したい。*Straits Chinese* を含む英語系華人がエリート層を構成したことは既述のとおりであるが、同国では *Straits Chinese* によって国家建設が進められたのである。

5. 為政者 Lee Kuan Yew の文化的特徴

シンガポールやマレーシアの政治家には *Straits Chinese* 出身者が少なくないと言われており、シンガポールの為政者 Lee Kuan Yew もその一人である。彼の母はニョニヤの代表で、その独特な文化の PR に熱心であったとの指摘がある（Clammer 10）。*Straits Chinese* は言語や生活習慣が現地化した華人で、母語がピジン化したマレー語または英語になっている者

が多い。Lee は、幼少時に両親とは英語で、祖父母とはピジン化したマレー語で話し、華語とは無縁の生活を送っていたという、自身の言語的背景を明らかにしている (Lee 35)。

1923 年にシンガポールで生まれた彼は、小説『ニョニャとババ』の作者・方北方 (1918 年生まれ) とほぼ同年代であるが、華語系で移民一世の方とは異なる世界に住んでいたといえ、言語的背景は同小説で描かれた林ババのそれに近いものがあると考えられる。華語学習を忌避した彼は、親に嘆願して 1930 年に英語校 (英語を教育用語とする学校) へ転校している (Lee 35)。既述のとおり、同小説で細峇が父のことを「英語教育だけ受けて、中国語教育の方は全く振り向きもしなかった」と批判しているが、Lee と重なるものがある。

1955 年、32 歳の時に Lee は華語学習を再開している。²³ 華人大衆にアプローチする上で必要に迫られたためであるが、前年に出版された同小説の影響を受けた可能性はないと考えられる。Straits Chinese にとっての教養は「西欧文化を身につけること」であり、「馬華文学には当然関心を示さなかった」、「中国古典を読む必要があれば英文を手にした」との指摘がある (太田 1998 154)。それでも、Lee が細峇と同様に「母語」を重視する姿勢に転じた理由は、華人大衆へのアプローチという実利目的のみによるものではなかったと考えられる。このことを考察する上で、Straits Chinese の特徴を改めて踏まえておきたい。

既述のとおり、Straits Chinese は華人の中で上昇志向の強い者が植民地体制に適応する過程で誕生したものと考えられる。この特異な華人集団が「アイデンティファイする先は、植民地権力が体現する欧米の価値体系」であり、宗教も主にキリスト教が信仰されたとの指摘がある (戴 1991 7-8)。すなわち、言語や価値観、宗教の面で西欧化が進んでいたといえるが、その一方で、冠婚葬祭等に関しては Straits Chinese は他の華人と比較してより中国的な伝統を保持している者が少なくなかった。つまり、全面的に西欧化しているわけではなく、西欧と中国の中間に位置する文化的にアンビバレントな存在であり、いわゆる *marginal man* に相当するものと考えられる。

Lee は 4 歳の時、中国的な伝統衣装を纏って叔母の結婚式に出席しており、冠婚葬祭に関する Straits Chinese の特徴を示している。²⁴

Clammer は、Straits Chinese の「奇妙な二律背反性」として、教育や言語、宗教等の面で欧米を指向する一方、言語等の点で中国との紐帯を喪失しているにも関わらず華人としてのエスニック・アイデンティティに固執する点を挙げている (127)。Lee もそうした傾向があると考えられるため、具体的な発言を通して検証することを試みたい。

Lee が首相に就任し、シンガポールが完全内政自治に移行して間もない 1959 年 8 月、彼は「英語教育を受けた人たちと将来」と題する演説を行った (黄・呉 (上) 1-10)。その中で彼はまず、マラヤで英語教育を受けた者の長所として「同質である」こと、「自分たちのことを中国人、マレー人、あるいはインド人とは考えなくなっていること」を指摘している。複合社会の調和を図る上で望ましい資質であると肯定的に捉えており、一定の説得力を持つ見解と考えられる。しかし、彼は英語教育のプラス面を踏まえた上で、マイナス面に関する懸念を示している。戦前のマラヤの英語校が「純イギリス式の価値観と理想を注入した」ため、「華人とインド人の場合、文化の根を断たれたため、活力を失って骨抜きに近い状態になっている」と述べた言葉に、それが端的に表れている。

シンガポールのマレーシアからの分離・独立後まだ日の浅い 1966 年、Lee は「教育と国づくり」についてのセミナーで演説を行っている (黄・呉 (上) 247-67)。その中で彼は、「ショービニストや心の偏狭な者や極端に走る者は、えてして一言語しか話せないもの」と述べ、上記と同様に複合社会における種族や言語に関する多元主義の立場を示している。

²⁵ その上で彼は、「純イギリス型の教育は、子供から過去との精神的きずなを奪い、去勢してしまう効果」を持っていること、「英校で学んだものと、自分の社会的・文化的背景とが、違ってしまう」ことを指摘し、「一人一人の子供に文化の根を保持させ、父祖の歴史に対する誇りをもたせて、自分の社会の問題に直面する自信を与える必要」があると述べている。

Lee は同様の見解をその後も繰り返し示している。二言語教育の強化が唱えられていた 1972 年、彼はシンガポール教員組合の記念式典で演説を行っている（黄・呉（下） 13-21）。

その中で彼は、シンガポールが個性ある社会として生き延びるためには文化的基盤を保持することが重要であるとの見解を示し、自分たちが「混合英語を話し、（中略）イギリス人の猿まねをし、自分自身の基本的価値観や文化をもたないのなら」、この国は建設する価値もないと言い切っている。また、文化の喪失に関して、「文化を失ったカリブ海のカリブソ型社会のさらに衰退したタイプ」になることに対する強い危惧も彼は示している。さらに、彼は幼少時に華語学習を忌避したことに触れ、「若いときの私は愚かでした」と述べている。

以上のとおり、Lee が一貫してエスニック・アイデンティティへの固執を示してきたことが明らかといえよう。Clammer が指摘した「奇妙な二律背反性」を Lee も持っていると考えて間違いないと思われる。「イギリス人の猿まね」などの言葉は、小説『ニョニャとババ』で林ババが「僕の祖国はイギリスさ。」と得意げに発言したことを想起させるものであり、華人大衆の Straits Chinese に対する批判的な見方を熟知していることを窺わせる。

もちろん、華語学習の再開に実利目的もあったことや、上述の Straits Chinese の組織 SCBA に Lee が加入していた時期があることを勘案すれば、彼の発言は注意深く解釈する必要がある。²⁶ 英国の植民地支配からの脱却を目指した彼が一時的であれ SCBA に加入した真意は測りかねるが、文化的に特異な華人としての両義性の表れであるのかもしれない。

文化的基盤の喪失に対する彼の危惧は、Straits Chinese であるゆえに「本来かくあるべし」と彼が思い描いた理想像に基づく面があり、観念的なものもあるように思われる。しかし、いずれにせよ彼がアイデンティティの危機に自覚的であったのは事実であり、その自覚に基づき様々な取り組みを推進したと考えられる。主なものが言語政策であり、それは複合社会の調和を図る方向で展開されたであろう。以下、それを明らかにすることを試みたい。

6. シンガポールの言語政策

シンガポールの言語政策を巡り考察する上で、まず同国の言語環境を概観しておきたい。同国ではマレー語、華語、タミール語、英語、の 4 言語が公用語である。国民はマレー系、華人、インド系、その他、の 4 種族集団に区分され、各種族集団に対応する「母語」（英語以外の公用語。華人の場合は華語）と英語の 2 言語習得が必要とされる。²⁷ これは、「母語」を文化的言語、英語を実用的言語と位置付け、機能の異なる 2 言語を学ばせるという独特な言語政策であり、「結合力のある複合民族社会を構築する目的」²⁸ に基づくものであった。

しかし、「母語」とされた言語が必ずしも本来の母語ではない場合があり、2 言語主義は実際には 3 言語主義（華人の場合、英語、華語、方言の 3 言語）を意味し、児童の学習負担が重かった。²⁹ また、植民地政府が採用した政策の影響で英語が重視される傾向が独立前から続いており、独立後の 2 言語主義による「母語」普及は容易でなかった。³⁰ そのため、政府は 1970 年代初頭から 2 言語教育の強化に着手したのである。既述の Lee の 1972 年の発言は、英語一辺倒で「母語」が疎かになることに警鐘を鳴らすものであった。

以上のことから、国民の多数派である華人を対象とする「母語」普及政策が、Lee の主導で 1979 年に開始されることとなった。華人の場合、方言の存在が問題視されていたため、方言使用を抑制し華語普及を図ることが意図された。この意図に関して、上記政策開始の前年の 1978 年、Lee は福建人（同国華人の最大の方言集団）の祝日を祝う式典で発言している（黄・呉（下） 67-74）。彼は、華人が方言を使い続けて方言と英語のみを話すようになればシンガポールは「分裂した多言語社会であり続ける」として、「二言語政策の華語の部分は、必ず成功させる必要」があり、次第に「華語が方言に代わって、シンガポール華人の共通語になるようにしなければならない」と、強い決意を表明している。

その決意が具体化されたのが、翌 1979 年に開始された「華語普及運動」であり、首相が発案し強力なリーダーシップで推進した点で特異な言語政策といえることができる。³¹ 運動開始の 2 年後である 1981

年、Lee はそれまでの 22 年間における人民行動党 (PAP) 政府の取組みの中で同運動が恐らく最も困難なものであった旨を述べており、上記の決意と相俟って、国家建設を進める上で同運動が担う役割の大きさを窺わせる。³²

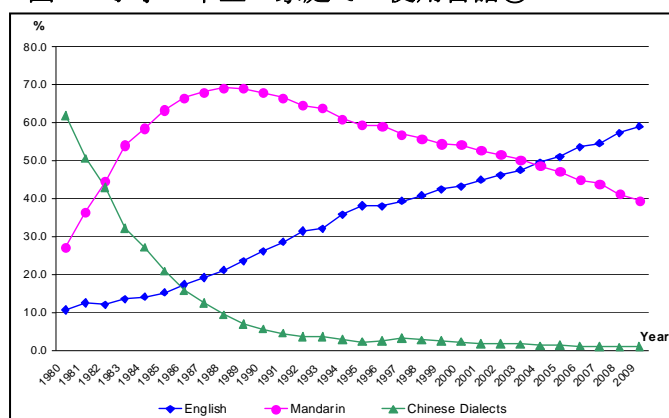
この言語政策の必要性は、華人児童の学習負担を軽減し二言語主義を効率化するという教育的理由と、華人社会に共通語を普及して個人間の意思疎通と社会的相互作用を促すという社会的理由の、2 点の理由から説明された (Mandarin Campaign Secretariat 17-19)。同運動は目的や対象を微妙に修正しつつ、例年の取組みとして 30 年以上継続されている。当初の目的は既述のとおり方言の抑制であったが、1990 年代初頭からは英語系華人に焦点を当てた取組みに変わった。後述するとおり、英語の使用割合の増大が懸念されていたためである。また、当初は専ら文化的言語として華語の価値が強調されていたが、1980 年代半ばから華語の実用性が主張されるようになった。いわゆる「改革・開放」政策導入後の中国の潜在的市場性を認識した動きであり、華語の経済的価値を重視する為政者の発言は現在でも続けられている。³³ 以下、約 30 年間の取組みの成果と課題を明らかにしたい。

表 1 小学 1 年生の家庭での使用言語①

年	方言	華語	英語	その他
1980	64.4%	25.9%	9.3%	0.3%
1990	5.6%	67.9%	26.3%	0.2%
1999	2.5%	54.1%	42.4%	1.0%

出所：Promote Mandarin Council, p.177.

図 1 小学 1 年生の家庭での使用言語②



出所：オンライン版シンガポール政府広報資料³⁴

表 1 および図 1 は、小学 1 年の華人の学童が家庭で最も使用する言語の割合を示している。これによれば、方言の使用割合は同運動開始の翌年である 1980 年では 64.4% の高率であったが、10 年後の 1990 年には 5.6% に激減している。同期間に、華語の使用割合は 25.9% から 67.9% へ、英語のそれは 9.3% から 26.3% へそれぞれ顕著に増加している。また、英語の使用割合の増加率が華語のそれよりも僅かに高くなっており、この傾向を踏まえて 1990 年代初頭から英語系華人に運動の焦点が移されたことは既述のとおりである。注目されるのは、英語の使用割合がその後も増加を続ける一方、華語の使用割合は漸減している点である。英語の使用割合は 2004 年に 50% 弱となり華語を抜いて首位になり、その後も顕著に増加し 2009 年に英語が 60% 弱、華語が 40% 弱となっている。以上のことから、同運動開始当時に Lee が示した、華語を華人の共通語にするという目標は努力目標にとどまっているといえよう。

華人の言語環境における英語化進行の背景には、2000 年に開始された「英語改善運動」[“Speak Good English Movement”] の影響もあるものと考えられる。これはシンガポール型ピジン英語である“Singlish”の使用を抑制して「正統」な英語の普及を図る言語政策である。“Singlish”はシンガポール人の独自性を表すものであるとして抑制に対して異論もあったが、上記のとおり英語化が着実に進行していることから、英語改善運動は一定の成果をあげているといえよう。

小説『ニョニヤとババ』におけるニョニヤの「英語ができなければ何の望みもない」という言葉は極端としても、既述のとおり、独立前からシンガポールでは英語化進行の動きが見られ、進学や就職に有利な英語の実用性が概して重視されてきたものと考えられる。二言語教育の強化の必要性が唱えられていた 1970 年代初期、Lee Kuan Yew は英語の実用性について説明している。³⁵ 彼は、「新しい知識を得るための最良の道は、旧植民地宗主国の言語を使い続けること」であり、「自分自身の言語に対する誇りと外国語の習得の矛盾は解決でき」る、英語は「植民地帝国の遺産とはいえ、役に立つもの」である等、

極めて実利主義的な考えを示している。

このような為政者の実利主義的な言語観の影響下、シンガポールの言語環境が形成されていった。しかし、Lee は合理主義的傾向だけでなく、非合理主義的なものへの志向性もあわせ持っていたと考えられる。“Singlish”の抑制は実利主義的・合理主義的見解に基づくものといえるが、³⁶ シンガポールで「模範となる言語は「本家」の書き言葉」であるとの指摘があり、³⁷ 英語にせよ華語にせよ「本家」を理想とし変種に価値を認めない発想があると考えられる。

Straits Chinese 出身であるゆえ、種族の独自性への観念的な固執を持ち、「母語」は本家と異なる変種であってはならないとする、種族や言語に対する理想化の発想が Lee にはあるものと考えられる。華語を本来の母語としないシンガポールで「本家」と同じ水準の華語の普及を図ることは、観念的・理念的な政策の域を脱しないものであるのかもしれない。

旧宗主国の言語に対する上記の発言など、優れて合理主義的な見解を持つ一方、種族性や「母語」の観念化・理想化などに見られる非合理主義的なものへの志向性も Lee はあわせ持っていると考えられる。それは、Clammer が指摘した Straits Chinese の「奇妙な二律背反性」、両義性の表れであるように思われる。

7. おわりに

小論では、文化変容の度合いの高い特徴的華人に注目し、小説に描かれたあり方と実在の為政者に関して、アイデンティティの態様や文化観・言語観を巡る視点で考察を試みた。Straits Chinese に関する先行研究は少なくないが、虚構と現実を対照する試みはほとんど先例がないものと思われる。小説『ニョニャとババ』の人物描写にはステレオタイプのものがあるものの、そこで主張された「母語」による文化的基盤の保持の課題は、実際に Straits Chinese の為政者が取り組んだものであり、一定の普遍性を持つ主張と考えられる。

しかし、華語を華人の共通語にするという為政者の意図は実現されておらず、「母語」による文化的基盤の保持は困難な課題であると考えられる。本来の「母語」ではない言語を通じてエスニック・アイデンティティを保持するのが容易でないことは想像に

難くない。そうした政策は「民族に標準語を指定する発想」(太田 1994 200)に基づくものであり、「制度化されたエスニックモデル」(Clammer 136)と考えられる。また、言語の機能分化の考え方等、種族や言語に対する固定的・静態的アプローチや、自己の言語の価値を他者の基準で図る発想についても議論の余地があり、今後の考察課題といえるだろう。

エスニック・アイデンティティに関する Straits Chinese の理念を、虚構と現実の対照で浮き彫りにすることを小論では試みたが、これを踏まえて今後、残された上記の課題を考察したい。

参考文献

- 荒井茂夫「マラヤ華人文芸の発展と背景 I」『三重大学人文学部文化学科研究紀要 (第二巻)』三重大学人文学部文化学科, 1985 年。
- 荒井茂夫「マラヤ華人文芸定着化の考察」『三重大学人文学部文化学科研究紀要 (第四巻)』三重大学人文学部文化学科, 1987 年。
- 黄彬華・呉俊剛編 (田中恭子訳)『シンガポールの政治哲学 リー・クアンユー首相演説集』(上・下巻) 井村文化事業社, 1988 年。
- 太田勇『国語を使わない国 シンガポールの言語環境』古今書院, 1994 年。
- 太田勇『華人社会研究の視点—マレーシア・シンガポールの社会地理』古今書院, 1998 年。
- 太田勇・今富正巳「マレーシア、シンガポールの華人社会の変貌」太田勇・大坪省三・前田尚美編『東南アジアの地域社会—その政治・文化と居住環境』東洋大学, 1987 年。
- 小木裕文「方修著「戦後馬華文学史初稿」」(書評)『中京大学教養論叢』第 20 巻第 2 号, 中京大学学術出版会, 1979 年。
- サイド・フシン・アリ編著 (小野沢純・吉田典巧訳)『マレーシア—多民族社会の構造』勁草書房, 1994 年。
- 戴國輝『華僑 「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版, 1980 年。
- 戴國輝編『もっと知りたい華僑』弘文堂, 1991 年。
- 田中恭子『国家と移民』名古屋大学出版会, 2002 年。
- 田村慶子『シンガポールの国家建設 ナショナルリズム』

- ム、エスニシティ、ジェンダー』明石書店、2000年。
- 原不二夫「戦後のマラヤ華僑と中国」同編『東南アジア華僑と中国 中国帰属意識から華人意識へ』アジア経済研究所、1993年。
- 原不二夫『マラヤ華僑と中国 帰属意識転換過程の研究』龍溪書舎、2001年。
- 方修『馬華新文学及其历史輪廓』万里文化企业公司、1974年。
- 方北方（奥津令子訳）『ニョニヤとババ』井村文化事業社、1989年。（原著：方北方『娘惹與峇峇』1954年初版、1964年再版）
- Goh, Keng Swee and the Education Study Team. *Report on the Ministry of Education 1978*. Singapore: Ministry of Education, 1979.
- Mandarin Campaign Secretariat, ed. *Speak Mandarin Campaign Launching Speeches* (1979-1989). Singapore: Ministry of Communication & Information, 1989.
- Promote Mandarin Council, ed. *Mandarin: the Chinese Connection*. Singapore: Ministry of Information and the Arts, 2000.
- Straits Chinese British Association. *S.C.B.A. Golden Jubilee Souvenir*. Singapore: Straits Chinese British Association, 1950.
- Suryadinata, Leo. *China and the ASEAN States: The Ethnic Chinese Dimension*. Singapore: Singapore UP, 1985.
- Rudolph, Jürgen. *Reconstructing Identities: A Social History of the Babas in Singapore*. Aldershot: Ashgate, 1998.
- Vasil, Raj. *Asianising Singapore: the PAP's Management of Ethnicity*. Singapore: Heinemann Asia, 1995.

注

- ¹ 作者：方北方、原著：『娘惹與峇峇』、1954年初版、1964年再版。邦訳版（訳者：奥津令子訳、発行：井村文化事業者）は1964年再版のものを原本とする。
- ² 華人という用語の定義に関して、中国国籍を保持したまま海外に私的かつ長期的に居住するものを華僑とし、華僑が居住国の国籍を取得した場合はこれ

を華人と呼び替えることが妥当であるとの指摘がある（戴 1991 20）が、小論では便宜上、華人という用語で統一する。

³ 原文は「星馬地区（包括北婆羅洲）」（但し表記は簡体字）であり、現在のシンガポール、マレーシア半島部およびサバ州（ボルネオ島）を指す。これらの地域の中でも、馬華文学の活動の中心はシンガポールとペナンであったとの指摘がある（田中 71）。

⁴ 1947年6月13日付記事という。なお、『南僑日報』が中国派マラヤ左派華人の属するマラヤ民主同盟の実質的機関紙であったことを原は指摘しており（2001 207）、親中国的な華字紙による世論調査であったことには留意すべきと思われる。

⁵ マラヤの華人の教育の危機を訴えた陳六使は、「反黄運動」期と重なる1953年1月16日、大学創設を提唱（1956年度より学生募集を開始）している（太田 33-44）。

⁶ シンガポールがマレーシアから分離独立して以来、シンガポールの華文文学は馬華文学と区別され、「新華文学」の略称で呼ばれるようになった（太田・今富 87-89）。「5月13日事件」は、マレー系優遇政策（いわゆるブミプトラ政策）に不満を抱く華人がマレー系と衝突したもの（死者196人）であり、マレーシア史上最悪の民族対立事件と言われる。

⁷ 詳細は同小説の「日本語版への序文」（3-6）、日本語版の訳者による「あとがき」（198-205）で述べられている。

⁸ 荒井は、「民族教育の使命感を抱いた多くの青年教師たち」が五四運動以後の文芸作品をマラヤに持ち込んだことが、馬華文学の誕生につながった旨を述べている（1985 63）。

⁹ 以下、小説からの引用は奥津令子訳『ニョニヤとババ』による。

¹⁰ 華人の多くは華語（標準中国語、いわゆる北京語）でなく中国南部の諸方言を用いていた。

¹¹ ここで言う「愛国」とは中国本土に向けたものであり、マラヤに対する愛国心ではない。

¹² 連合マレー州はマレーシア半島部のペラ、スランゴール、ヌグリ・スンビラン、パハンの4州で構成された。

¹³ 幫には地縁的な「郷幫」と職業別の「業幫」があった（戴 1980 34）。

¹⁴ 例えばシンガポールの場合、広東人は Kreta Ayer 地区に、福建人は Tiong Bahru 地区に分かれて居住していたという（Vasil 2-3）。

¹⁵ 英国植民地当局は、1933年に「外国人条例 (Aliens Ordinance)」を出して華人の流入を制限する一方、

家族や女性の渡来を認めた。それまで、華人は専ら良質の労働力として重視され、婦女子、家族の移住は自由ではなかった（太田・今富 82）。小説『ニョニヤとババ』の李天福も、郷里に妻子を残し出稼ぎの「苦力」として東南アジアに渡っている。

¹⁶ 華人は母語または教育用語の点で華語系（中国系方言および華語を含む）、英語系に大別される。

Straits Chinese は母語が英語となっている者もいることから、英語系華人として区分される。

¹⁷ 経済的利益の獲得を重視する英国は、移民が問題を起こさない限り彼等の生活には干渉しない姿勢をとり、移民の分離を促した。この分割統治政策が、独立後の国民統合を困難にした一因と考えられる。

¹⁸ SCBA の創設者である Lim Boon Keng が中華総商会でも活動していたことから、両組織は必ずしも対立的関係になかったとの見方もある（Rudolph 111）。

¹⁹ 戴からの引用（1980 54）。なお、戴は「落地生根」を早期に実践していた者として Straits Chinese の存在を挙げているが、彼等が少数の例外で支配体系の上層に依拠していたことから、真の「落地生根」ではなかった旨を述べている（89）。

²⁰ まず、1955 年にインドネシアと二重国籍防止条約を結び、翌年 10 月、中国訪問中の David Marshall 前シンガポール主席大臣（同年 7 月に辞任）に周恩来首相（当時）が二重国籍否定の見解を明示している。

²¹ 講話は 1956 年 12 月 18 日、ラングーン市において行われた。（戴 1991 256-58）

²² 1957 年 10 月 7 日付『南洋商報』（中立か、若干国民党寄りとされる）の論説という。（原 1993 183-84）

²³ 2009 年 3 月 17 日、“Speak Mandarin Campaign” 30 周年式典における演説での述懐。

（http://www.news.gov.sg/public/sgpc/en/media_release/s/agencies/mica/speech/S-20090317-1.html）

²⁴ 自伝に写真を掲載し、“dressed in the traditional costume of the time”と説明を加えている（Lee 33）。

²⁵ Lee の率いる人民行動党（PAP）は、種族間に優劣を置かない立場で「マレーシア人のマレーシア」の実現を標榜していた。種族や言語を巡る立場の相違から、合併から 2 年でシンガポールはマレーシアから追放される形で独立を余儀なくされた。したがって、種族や言語に関する多元主義はシンガポールの存立の基盤であった。

²⁶ SCBA 設立 50 周年を記念する刊行物の中で現在（1950 年）の委員が紹介されており、Lee Kuan Yew の写真と氏名が掲載されている（Straits Chinese British Association 25）。ちなみに、この経歴は彼の自伝では触れられていない。

²⁷ 1956 年の全党派委員会（All-Party Committee）勧告により 4 言語が公用語化されるとともに、マレー語、英語、各種族の「母語」（華人の場合は華語）の 3 言語を習得させる 3 言語主義が標榜されたが、マレーシアからの分離・独立後、2 言語主義に修正された。

²⁸ Goh Keng Swee and the Education Study Team 2-2. なお、同書の頁付は p.1-1, 1-2,... という方式である。

²⁹ 例えば華人の場合、既述のとおり幫を単位とする方言集団に分かれており（福建、潮州、広東、海南、客家が五大幫であった）、華語でなくそれぞれの方言を用いていた。Vasil が指摘するとおり（3）、他の種族も言語等の点で必ずしも同質的集団ではなかった。

³⁰ 1947 年、英国植民地政府が「教育 10 カ年計画」に基づき「事実上英語を共通語とする国民統合政策を採用した」ため、教育面での英語化が進行し、初等・中等教育の言語校別生徒数は 1954 年に英語校が華語校を抜いて首位に躍進した（田中 106-107）。

³¹ 原語では「全国推广華語運動」（但し表記は簡体字を使用）、英語では “Speak Mandarin Campaign”。小論では、以下、便宜的に「華語普及運動」とする。

³² なお、ここでのいう 22 年間とは、完全内政自治への移行に伴う自治政府選出のために実施された、1959 年の総選挙で人民行動党が政権を獲得してから年数を意味する。（Mandarin Campaign Secretariat 87）

³³ 例えば、2009 年に開かれた同運動 30 周年式典での Lee Kuan Yew の発言（注 23）等。

³⁴ オンライン版シンガポール政府広報資料の URL は注 23 を参照。なお、同資料では正確なパーセンテージは記載されていない。

³⁵ 1971 年 11 月、「東と西の出会い」と題する演説（黄・呉（上） 363-378）。

³⁶ Lee は、シングリッシュは言語学者には興味深くとも地域社会には益するものがない旨を述べている（Promote Mandarin Council 36）。

³⁷ 太田の指摘（1994 227）。なお、太田はシンガポールにおける華語のあり方を論じる中でこう述べているが、あわせて「外来文化に権威を」見出す「文化コンプレックス」について論じており、その文脈から太田の見解は英語に関しても妥当するものと考えられる。

（Received: September 30, 2010）

（Issued in internet Edition: November 1, 2010）